

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月4日現在

機関番号：13201

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21720285

研究課題名（和文） 古墳時代におけるヒスイ勾玉の生産と流過程に関する研究

研究課題名（英文） A Study on production and circulation process of jade comma-shaped beads in the Kofun period (3-6th century A.D.)

研究代表者

高橋 浩二（TAKAHASHI KOJI）

富山大学・人文学部・准教授

研究者番号：10322108

研究成果の概要（和文）：弥生時代から古墳時代における翡翠勾玉の製作技法について明らかにした。また、研究協力者の協力を得て、翡翠原産地の糸魚川地域における玉作遺跡の消長と玉生産の変遷を明らかにした。次に、同じく研究協力者の協力を得て、翡翠勾玉のうち丁字頭勾玉の出現と流通の意義について明らかにした。加えて、韓半島の釜山・金海出土の翡翠勾玉を集成し、一部のものを資料化した。そして最終的に、これらの成果を2冊の報告書にまとめた。

研究成果の概要（英文）：This research clarified about the production technique of jade comma-shaped beads in the Kofun period from Yayoi period. At the same time, clarified about change of production sites and beads production in the Itoigawa area of jade place of origin. Then, studied about appearance and circulation of the Chojigasira type comma-shaped beads. In addition, collected and documented jade comma-shaped beads of the Busan and Gimhae of the Korea. And finally reported these result as two reports.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：日本考古学、古墳時代、翡翠勾玉、生産、流通、韓半島

## 1. 研究開始当初の背景

弥生・古墳時代の翡翠勾玉（研究課題名はヒスイとしたが、以下一部の文献名を除いて翡翠に統一する）に関しては、これまでも分類的研究や集成的研究、製作工程の研究、そして副葬玉類の組合せに関する研究などが行われてきたが、小林（小林行雄 1976「神功・応神紀の時代」『古墳文化論考』平凡社）や河村（河村好光 1992「攻玉技術の革新と出

雲玉つくり」『島根考古学会誌』第9集、島根考古学会）による研究以降、翡翠勾玉の製作技術や型式学的研究は十分に深められておらず、また小山による分布状況の研究（小山雅人 1992「弥生勾玉の分布とその変遷」『究班』埋蔵文化財研究会 15周年記念論文集）は見られるが、その製作地や流過程を解明するまでには至っていなかった。また、生産遺跡の調査例が少なく、時系列的な解明が十

分にすすんでいなかった。

しかし近年、河村によって弥生時代の翡翠勾玉の製作技術とともに、北部九州を中心に分布する櫛形勾玉や丁字頭定形勾玉などがこの地で作られたことが明確にされ(河村好光 2000「ヒスイ勾玉の誕生」『考古学研究』第47巻第3号)、また大賀によって翡翠定形勾玉の中にも形状や穿孔方法などに差があり、古墳中期には透明感がほとんどなく、大形厚めのつくりで、腹部断面形がD字形をなし、先端が鋭利な工具(鉄製穿孔具と考えられる)で片面穿孔されたものが出現すること、製作地の変化が予想されることなどが明らかにされ(大賀克彦 2002「弥生・古墳時代の玉」『考古資料大観』第9巻、大賀克彦 2005「稲童古墳群の玉類について—古墳時代中期後半における玉の伝世—」『稲童古墳群』行橋市教育委員会)、研究が大きく前進した。

加えて、翡翠原産地の新潟県糸魚川地域での発掘調査が進展し、古墳時代前期から中期における生産遺跡の様相が解明可能な段階に至っている。

また、翡翠勾玉は韓半島でも多数出土している。韓国出土の翡翠勾玉については崔(崔恩珠 1986「韓国曲玉의 研究」『崇實史學』第4輯、崇實大学校史学会)や門田(門田誠一 1989「日本と韓国における硬玉製勾玉についての再吟味」『日本海文化研究』富山市・富山市教育委員会、門田誠一 2004「韓国古代における翡翠製勾玉の消長」『特別展 翡翠展 東洋の至宝』毎日新聞社)によって集成的研究が行われているが、近年では発掘調査が進展し、加えて調査報告書の刊行がすすみ、類例が大幅に増加している。この状況を受けて、古墳時代における翡翠勾玉の流通過程を総合的に理解するためには、韓半島出土の翡翠勾玉を再集成し、また可能な限り資料化することも重要であると考えた。

## 2. 研究の目的

このような研究の進展状況を受けて本研究では、翡翠勾玉の製作技術や生産遺跡の様相の解明と、分布や出土数の分析を通じた流通過程の解明とを相互にすすめながら、原産地及び生産遺跡と古墳との広域的な流通関係を明らかにすることを目的とした。具体的には、次のような目的と計画のもとに研究を行った。

(1) 製作遺跡の資料調査を通じて、弥生時代から古墳時代における翡翠勾玉の製作工程と製作技法の変化を明らかにする。

(2) 翡翠原産地における玉製作遺跡の消長と製作玉類の変遷過程を明らかにする。

(3) 翡翠勾玉の集成を基礎に、弥生墳墓・古墳等出土の翡翠勾玉の変化を明らかにする。

(4) 韓半島出土の翡翠勾玉を再集成し、可

能な限り資料化を行うとともに、新羅王陵を中心とする翡翠勾玉の流通過程について明らかにする。

(5) 上記の成果を比較検討し、古墳時代の翡翠勾玉の生産と流通過程について総合的に評価する。

## 3. 研究の方法

研究の目的のうち、(1)については弥生時代から古墳時代の北陸(新潟県を含む)の玉作遺跡出土の資料を実見するとともに、翡翠半円形勾玉とその製作工程品、また翡翠定形勾玉とその製作工程品の候補となる資料の実測及び写真撮影を実施して、資料の検討をすすめた。

(2)については翡翠原産地の糸魚川地域において近年調査された南押上遺跡や笛吹田遺跡などの重要資料を複数回にわたって実見した。また、翡翠勾玉が衰退するのに対し、滑石製の玉類が増加する古墳時代中期後半の重要資料である富山県朝日町浜山玉造遺跡の資料を同じく実見し、翡翠のほか供伴土器の実測を行った。そして、研究協力者の協力を得て、翡翠勾玉製作遺跡の消長と製作玉類の変化の検討をすすめた。

(3)については各地の古墳・遺跡を巡検し、集成をすすめるとともに、研究協力者の協力を得て弥生時代から古墳時代における分布の変化や流通過程の歴史的背景に関する検討をすすめた。

(4)については、韓国の遺跡や博物館を巡検し、合わせて文献複写や研究打合せを通して韓国出土翡翠勾玉の集成をすすめた。それとともに、研究協力者の協力を得て実測や写真撮影を実施し、検討をすすめた。

そして(5)として、現段階における最終的な評価を行った。

このように、本研究は研究協力者の協力を得て、翡翠勾玉の製作技術および生産遺跡の様相の変化と流通過程の変動とを相互に比較検討しながら研究をすすめるところに特色がある。

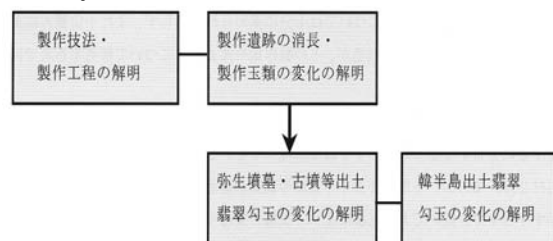


図1 研究の枠組み

## 4. 研究成果

本研究では、5. 主な発表論文等で記したように、現段階における研究の成果を2冊の報告書にまとめた。明らかになった成果は次のとおりである。

### (1) 翡翠半球形勾玉の製作技術と地域性の背景

古墳時代の翡翠勾玉の前史として、弥生時代中期の北陸で多く製作され、流通した翡翠半球形勾玉の製作技法や製作工程、そして地域性の問題について調査を行った。その結果、翡翠半球形勾玉は原石の採取、前処理の後、基本的に分割(荒割・形割)→研磨→抉り入れ→穿孔→仕上げという工程を経て完成すること、そして分割工程では擦切分割技法が多用される(北陸西部の遺跡で多く見られる)こと、擦切分割技法がほとんど使用されない場合には直接打撃による打割と剥離整形が多用される(北陸東部の遺跡で多く見られる)ことが再確認された。

そしてこれを踏まえて、擦切分割技法の採用差、および打割と剥離整形への依存度合の差が、半球形勾玉の形態差や翡翠の色質の違いに強く反映されることを主張し、最終的に管玉製作における擦切分割技法が、北陸の西から東へ波及するにしたがってその重要性を低下させていくのと密接に関係するということを明らかにした。また、弥生時代後期には北陸西部でも擦切分割技法の使用が急激に低下するが、それにしたがって平面形や断面形の個体差が大きく、白色部分の多く混じる翡翠半球形勾玉が増加し、それとともに蛇紋岩や瑪瑙などの多様な色質の鞆形勾玉が出現する過程を明らかにした。

### (2) 翡翠定形勾玉の製作技法と流通過程、および北陸における製作開始時期の検討

弥生時代に出現する翡翠定形勾玉については、これまで糸魚川地域から原石ないし半成品が運ばれた後、北部九州で完成品に仕上げられ、そして北部九州を中心に各地へ流通したことが指摘されている。

これに対して、北陸の玉作遺跡の出土品を調査した結果、翡翠定形勾玉の製作工程品と判断される資料を見出し、それらは図2の1・2(施溝分割技法の使用による三角形品や直方体の作出)→3(三角形品への研磨の開始)→4(研磨による半月形品の作出)→5(腹部抉り入れによるC字形品の作出)→6(C字形品の入念な研磨)→7(穿孔時の予備穿孔と考えられるもの)の順番に製作されていくことを指摘した。

しかし、これら一連の製作工程資料がまとめて出土した遺跡は未確認であり、単体で出土する例が認められることから、翡翠半球形勾玉の場合は分割から仕上げまでが一つの遺跡で一貫して行われ、そのほとんどは完成品の状態で流通したのに対して、翡翠定形勾玉の場合は勾玉の形や厚さが整えられた段階(三角形品や直方体、半月形品、C字形品)で持ち運ばれ、流通先で最終的な研磨や穿孔、仕上げが行われることが少なくなかつ

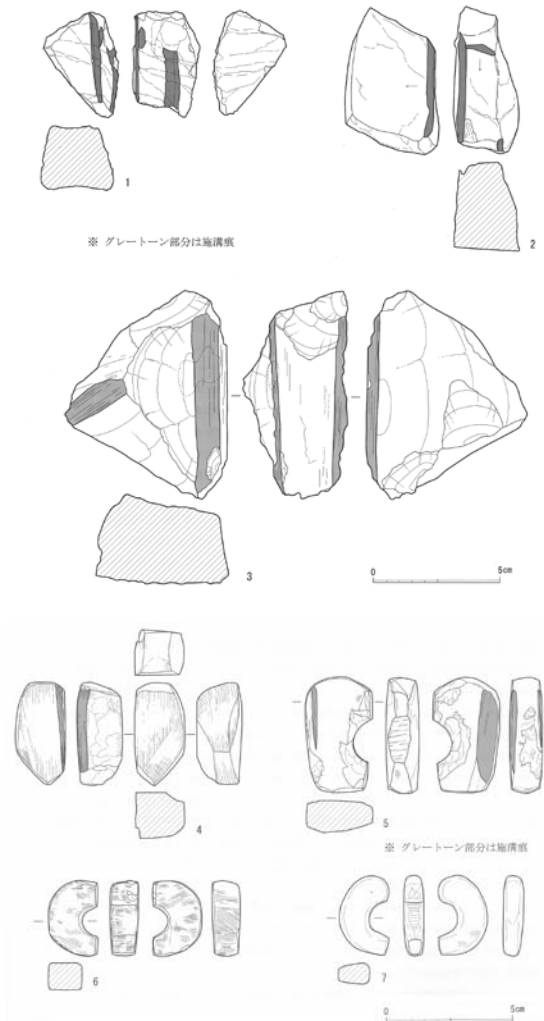


図2 翡翠定形勾玉製作工程資料

たところを指摘した。

さらに、北陸における翡翠定形勾玉の製作開始時期が、弥生時代後期後半から終末期前半(庄内式前半期)まで遡ることを明らかにした。

### (3) 翡翠原産地周辺における玉生産の変遷の検討

近年、古墳時代前期に遡る翡翠勾玉製作遺跡の発掘調査が相次いで実施され(糸魚川市南押上遺跡、笛吹田遺跡、姫御前遺跡、横マクリ遺跡など)、それによって翡翠原産地の糸魚川地域における玉生産の変遷過程が古墳時代のほぼ全期間を通して把握できるようになった。

その他の遺跡も含めて出土玉類の内容と時期が再検討された結果、翡翠勾玉の製作は古墳時代前期中葉～後葉にピークをむかえるが、古墳時代中期には減少し(糸魚川市三ツ又遺跡、大角地遺跡)、須恵器のMT15期ないしTK47期の時期を最後に糸魚川地域における翡翠勾玉の生産は終焉する(糸魚川市大角地遺跡第7号住居址、田伏遺跡第4層上位

の状況から判断) こと、さらに古墳時代前期中葉～後葉には翡翠・滑石・蛇紋岩の勾玉、緑色凝灰岩・滑石の管玉、滑石・蛇紋岩の棗玉の生産がなされ、古墳時代中期には緑色凝灰岩管玉は衰退する一方、滑石の白玉・有孔円板・紡錘車などの生産が開始され、古墳時代後期にはほぼ滑石製品のみを生産に移行したことなどが、研究協力者の木島によって具体的に明らかにされた。

また、同じく研究協力者の山岸によって、奈良県富雄丸山古墳や新沢 500 号墳と同型式の琴柱形石製品と翡翠勾玉製作工程品などが出土した糸魚川市笛吹田遺跡の帰属時期が検討された。

#### (4) 古墳時代前期における翡翠製丁字頭勾玉の出現とその歴史的意義

流通に関しては、同じく研究協力者の大賀によって、主に次のことが明らかにされた。

第一に、古墳時代前期の翡翠製丁字頭勾玉は前Ⅲ期に出現する。それは鮮緑色半透明の翡翠を選択的に利用し、そして石製穿孔具で穿孔される。基本的には定形勾玉を指向するが、細部形状や法量の変異が大きいのが特徴である。古墳時代前期後半まで製作が継続した後、製作技法の転換とともに衰退することが明らかにされた。また、生産地に関しては糸魚川地域の姫川下流域の可能性が高いが、流通の中心である畿内の可能性も否定できないという。

第二に、翡翠製丁字頭勾玉の出現は、弥生時代以来の変遷過程とは断絶する。弥生時代中期に北部九州で製作され、伝世していた翡翠製丁字頭勾玉は、弥生時代後期後半以降に瀬戸内海ルートを経由して東方地域へと流入し、その一部が古墳時代の翡翠製丁字頭勾玉の祖型として模倣されたこと、デザインの選択は畿内地域が主導したことなどが指摘された。

第三に、丁字頭勾玉は畿内から分配型威信財的に各地へと配布された。その流通状況は、三角縁神獣鏡を代表とする分配型威信財とよく一致し、弥生時代以来の地域間関係に強く規定された流通状況を示す他の多くの玉類とは明確に異なる。このように、古墳時代前期の翡翠製丁字頭勾玉は、三角縁神獣鏡を代表とする同種の威信財と同様に、広域的で、求心的な集団関係を構築する目的のために配布されたことが明らかにされた。

#### (5) 韓半島出土翡翠勾玉の集成と資料化

新羅王陵を中心にして多数の翡翠勾玉が出土している。これに関しては、日本列島からの流通説と韓半島内に系譜を求める説とがある。しかし、産地分析は十分に進展しておらず、韓国内では原産地也未発見であり、現状では原産地問題について飛躍的な解決が望め

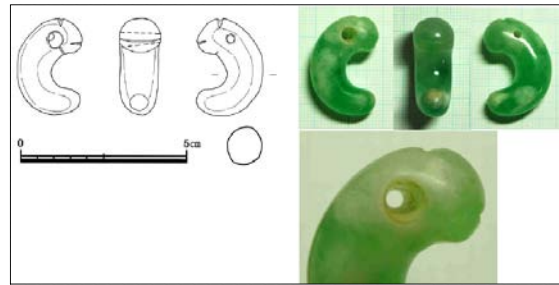


図3 福泉洞 38 号墳の翡翠勾玉(3 世紀後葉)

めないだけに、考古学的な検証がいつそう重要な意味をもつ。こうした観点から、考古学的な集成と資料化は不可欠と言える。また、日本列島の古墳副葬品との比較の上でも重要である。

今回、集成と資料化を行った釜山・金海地域は、弥生土器や布留式土器、銅矛、さらには碧玉製品などの倭系遺物が多く見られ、日本列島との関係が深い地域である。加えて、3～6 世紀の長期にわたる副葬玉類の変遷過程を知る上で重要な福泉洞古墳群が存在する。結果的に、三韓時代から 6 世紀にかけての、22 古墳(遺跡)から合計 29 点の資料が集成された。そして、未公表の資料を除外して、可能な限り実測とカラー写真による資料化を行った。

統一された分類と基準、記述方法にしたがって、他地域の集成をすすめ、合わせて資料化を行うことを通して、日本列島と韓半島の諸地域との交渉・交流の歴史を明らかにすることが期待される。

#### (6) 今後の課題・展望

翡翠勾玉の製作技法に関しては、直径が大きくすり鉢形の断面をもつ穿孔部から直径が小さく円筒形の断面をもつ穿孔部へ移り変わり、後者のほとんどは片面穿孔であることから、古墳時代前期後葉～中期前半に石製穿孔具から鉄製穿孔具へ穿孔方法が変化したことが古墳出土品の調査で明らかにされているが、これを玉作遺跡の調査から実証的に検証することが必要である。

また、翡翠原産地における玉製作遺跡に関しては、帰属時期の絞り込みをさらに詳しく行うとともに、製作玉類の種類と量を精査し、玉生産の変遷過程の解明をさらにいっそうすすめることが重要である。

次に、流通に関しては、弥生墳墓・古墳等出土の翡翠勾玉の集成をさらにすすめること、加えてそのほとんどを占める翡翠定形勾玉の変遷と流通過程の解明をさらにいっそうすすめることが重要である。

韓半島出土の翡翠勾玉の集成と資料化に関しては、これをいっそうすすめるとともに、日本列島のものとの比較検討を通して、その変遷と流通過程を明らかにすることが必要

である。

そして、これらの成果を比較検討するとともに、他の玉類や古墳出土遺物、また朝鮮半島系遺物などについての研究成果を踏まえながら、古墳時代の翡翠勾玉の生産と流通過程に関する総合的な検討をいっそうすすめることが必要である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

- ① 高橋浩二、翡翠半球形勾玉の製作技術と地域性の背景、待兼山論集Ⅱ－大阪大学考古学研究室 20 周年記念論集一、査読無、2010、pp. 215-230.
- ② 高橋浩二、味難王陵地区古墳群および皇吾洞 34 号墳出土の翡翠勾玉、慶北大学校考古人類学科 30 周年記念 考古学論叢、査読無、2011、pp. 611-626.

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 2 件)

- ① 高橋浩二、大賀克彦、木島勉、山岸洋一、古墳時代におけるヒスイ勾玉の生産と流通過程に関する研究 (平成 21～23 年度科学研究費補助金若手研究 (B) 研究成果報告書)、2012、70.
- ② 高橋浩二、韓半島出土翡翠勾玉集成－釜山・金海編－ (平成 21～23 年度科学研究費補助金若手研究 (B) 研究成果報告書)、2012、51.

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

高橋 浩二 (TAKAHASHI KOJI)  
富山大学・人文学部・准教授  
研究者番号：10322108

##### (2) 研究分担者

( )  
研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )  
研究者番号：

##### (4) 研究協力者

大賀克彦  
木島 勉 (糸魚川市教育委員会)  
山岸洋一 (糸魚川市教育委員会)  
朴 天 秀 (慶北大学校・人文大学・教授)